

---

# Sweet Memories

Urey

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sweet Memories

### 【NZード】

N8762D

### 【作者名】

Urrey

### 【あらすじ】

王女とお姫さまの成長が垣間見える作品。

ある時、ある場所に王子様とお姫様がいました。王子様はいつもひとりぼっち、なぜなら王子様を人々は恐れていたからです。

「なんであるなのが王子なんだろう?」この国は大丈夫だろ?「王子様はいつもひとり…。

お姫様はいつもげんき。お姫様といつてもなばかりで、洗濯おばさんに混じって青空の下いつも洗濯をしていた。

「聞いたかい?隣の国の化け物王子?見た者は呪われるって話だよ。なんでも隣の国に出稼ぎに行つた人の話では…。」

王子様はいつも迷つていてる。我が息子は大丈夫だろ?心配だ。何せあの子は、化け物王子なんて噂がたつてしまつておる。トコトコ…。ああ今日もぬけるような青空だ。しかしあが国情勢は…。

「こんにちは、王子様。どこへ行かれるんですか?」

「…」

「は?」

王子様は道にも迷つていてる。

大臣は真実を知つていてる。だから時々王子を慰めていてる。真実の言葉で…。

「どうして下を向いているんだ?」

「だつて皆僕を恐れて逃げるから。」

「誰を見て逃げるつて?」

「僕を見て。」

「そんなわけない。だつてあなたは…。」

王子様は小さい頃から毎日勉強をしていた。ある時、王族の専属

家庭教師が言った。

「あなたのお父様があなたぐらいの時はこんな簡単な事すぐ出来たでしょ。どうしてあなたはできないのかしら？」

王子はその晩眠れなかつた。家庭教師の言葉を思い出して眠れなかつたからだ。傷ついたのだ。家庭教師のたつた一言で。たつた一言で…。

お姫様は時々星空を見ている。この広い世界のどこかで私を必要してくれる人がいるのかしら？そういうえばこの前化け物王子がどうとかいうとか…。ああ今日もよく働いた。明日はお弁当を作つていきましょう。あれもこれもいれて…。

「姫さま、昨日言つた件なんですが…。あら？」

「ZZZ。」

お姫様は寝つきもとつても良い。

「誕生日パーティ？」

「そうだ。」

「隣国の姫君の？」

「そうだ。」

「しかし僕はみんなに恐れられてい。」「問答無用だ。いいか、王子よ。そなたはもう16になる。そろそろ王としての仕事を覚える時だ。いや、これでも遅いくらいだ。」

「しかし、僕は…。」

「ああ聞かぬ。パーティは明後日だ。そなたにお供するように大臣にはすでに頼んである。よいな。ではな。」

「しかし僕…。」

王子は王様が去つていった場所をただ見つめるしかなかつた。

パーティー 前日

お姫様

「なんでパーティ前日に言うのよ。」「

「だつて姫様、毎日楽しそうに働きに行かれていたから。」

「だからってパーティ前日にドレスの打ち合わせなんて。」

「ご心配なさらなくても、姫様以外の準備は完璧でござります。」

「…そんな事を言つてるんじゃないわよ。」

王子様

「王子、何をそんなに心配しているのです?」

「僕、明日のパーティになんか行きたくないよ。」

「心配しなくとももう向かっています。」

「…。」

「大丈夫ですよ。明日のパーティは皆さん仮面をつけていらっしゃいます。」

「誕生日パーティじゃなかつたの?」

「…そんなこまかい事を気にしていたらいい王子になれませんよ。」

「…。」

パーティ当日

王子様は壁の花となつていた。大臣は来賓者に挨拶をして回り、一通りしてまわると王子様に告げた。

「王子、今日は仮面誕生日パーティですよ。誰も噂など気にしておりません。あの方と一曲踊つてきていらっしゃつたらどうですか?」大臣はパステルカラーのドレスを着た女性に手招きをした。女性は軽く王子様に向かつて会釈をした。

「の方は?もしかして…、」

「もしかしなくともパーティの主役のお姫様です。」

お姫様はまっすぐ王子様の方に向かつてきて、

「あの私と踊つていただけませんか?」

「え?あ、はい。よろしくお願ひします。」

お姫様は王子様の手を取り曲に合わせて踊り始めた。

「姫様、僕の噂はご存知ですか？」

「ええ、時々耳にします。」

「僕のこと怖くないのですか？」

「どうして？」

「良くない噂が流されているので。イタツ。」

「『めんなさい。ダンスは慣れていないくて。』」

お姫様は王子様の足を踏んでしまい、ほおを赤く染めた。

「いえ、気にしないでください。」

「ダンスはやめてあちらでお話をしませんか？」

「そうですね。」

お姫様は王子様を人気のない場所まで案内した。

「ああ、お姫様ぶるのはやつぱり肩がこるわ。」

王子様は田をぱちくりしている。お姫様は仮面を取った。

「王子、あなたも仮面なんか取つて素顔で話をしませんか？」

「は、はあ。」

ゆつくり王子は仮面を取った。

「あら？ どこが化け物王子なの？ 普通の人じやない。」

「普通？ そんなわけないよ。姫様、僕の噂ご存知でしょう？ みんな僕を見て逃げるんだ。」

「… そうね、しいて言えばまず姿勢が悪いわ。それに顔色も悪いし…、きちんと日光浴びているの？」

「… いや。」

「じゃあ、毎日何をしているの？」

「何つて…、将来の為に勉強をしているんだけど。」

「毎日？」

「そうだよ。」

「…。」

「あつ、たつたまに大臣に付き合わされて、町に行くけど。」

「そこでみんなが逃げるの？」

「う、うん。」

お姫様はずつと王子様の目を見て話していた。しかし、王子様は…。  
「王子、あなたは誰も見ていないわ。今話している私の目も見ていいじやない。」

「え？」

「普段もそなんでしょう?なのに、どうしてあなたはみんながあなたを見て逃げたってわかるの?」

「だつてみんなが僕の噂話をしているから。」

「王子の話していることは真実ですよ。」

それまで2人の話を黙つて聞いていた大臣が、どこからか現れて王子様とお姫様の話に加わった。

「本当に王子の姿を見て逃げるの?」

「いいえ。」

大臣は静かに首を振つた。

「けど、さつきは僕の話は本当だつて。」

この時初めて王子は大臣の目をしつかり見据えた。そして、初めてお姫様の顔をしつかりと見つめた。

「私は噂話しているということ真実と言つたんです。あなたは一国の王子なんです。噂話ぐらい誰でもします。王子、あなたが小さい頃よく国王様と比べられ確かに悪い噂もたちました。しかし、王子には王様と違つた素晴らしい面がたくさんあります。私はよく知つていますよ。」

そう言うと大臣はにっこりと微笑んだ。

「けど僕は化け物王子つて噂が…。」

「あんな噂誰も本気で信じてないわよ。もし民が逃げるとしたら、それはあなたの態度じゃないかしら?」

「態度?」

「そう。そんなにオドオドしていたら誰だつて不信に思つわ。」

「……。」

「王子?」

王子様はなにかを決意したようだ。

「大臣、パーティは切り上げて帰るぞ。」

「はい。ああ王子、先に行つていってください。少々姫様と話をしたいことがありますので。」

「早くしりよ。」

「はい。」

王子様は、今までとは別人のよつたな顔つきで歩いて行つた。

「……言い過ぎたわ。」

「いいえ。ありがとうございます。あそこまで言つて下さつて。」

「本当にあれで良かったの？」

「ええ。王子は周囲の噂でいつも落ち込んでおられました。最近は化け物王子だなんて噂にまで。これからは姫様の言葉で変わるでしょう。私の言葉では、あそこまで王子の胸には届かなかつたでしょうから。」

「どうして私の言葉で変わるの？」

「決まつていいじやないですか。男なら誰だって愛らしい姫君の前ではいい男でありたいと思うのですよ。…では失礼します。」

王子様と大臣の去つた場所には真つ赤になつて立ち尽くしたお姫様だけが残されていました。

王子様はお姫様に会つてから変わり始めた。堂々とし、まっすぐに民を見つめ執務をこなした。王子様が立派な王様になるのもそう遠い話ではないだろう。

「これは私が王子様だった頃のお話。

(後書き)

楽しんでいただけたら幸いです。初投稿作品です。よかつたらご意見をお聞かせください。メールお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8762d/>

---

Sweet Memories

2010年10月8日15時33分発行